

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520102

研究課題名（和文） ソフォニズバ・アンギッソーラ研究：  
十六世紀イタリア女性肖像画の諸問題研究課題名（英文） The Study of Sofonisba Anguissola：  
Problems of Woman Portraits in the Sixteenth Century Italy

研究代表者

喜多村 明里（KITAMURA AKARI）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90294264

研究成果の概要（和文）：16世紀後期イタリアで自画像を多数制作し、人文主義的な教養と才能に満ちた類稀な貴族女性として同時代に名声を馳せたソフォニズバ・アンギッソーラの作品群に関し、そこに同時代のジェンダーあるいは女性概念のほか、古代の女性画家マルキアや、ローマの沈黙の女神ララをめぐる言説が投影されていたこと、女性画家の自画像そのものが「沈黙の芸術」としての〈絵画芸術〉の寓意人物像とみなされえたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the iconological meaning of the self-portraits by Sofonisba Anguissola, the Italian learned noble woman in the second half of the 16th century. Not only conditioned by the gender but also deeply influenced by the humanism culture of the era, her self-images were represented as like Marcia the Roman virgin painter and as Lara, the Roman goddess of the silence, and also as the allegorical figure that symbolize the art of silence, i. e. the art of painting.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	400,000	120,000	520,000
22年度	800,000	240,000	1,040,000
23年度	400,000	120,000	520,000
24年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：肖像画、女性、美德、女性画家、イタリア、16世紀、美術史、アンギッソーラ

## 1. 研究開始当初の背景

イタリア・ルネサンス期の女性肖像画の流行は1420年代以降、ピサネッロのほかマザッチョ、フィリッポ・リッピなどの作品に始まり、当初は厳格なプロフィール形式で花嫁あるいは新妻の盛装を描き示すことで、家門の栄誉と女性の美德を強調していたことが

知られる。真珠やルビーなどの宝飾品、数珠と聖書、豪華な織物地の精緻な意匠文様—〈勝利〉を意味する棕櫚や〈多産・豊穡〉を象徴する石榴文様、夫の個人紋章（impresa）—等の細部描写は、像主の女性の美を描きだすばかりではなく、むしろ同時代の家族概念のもとで築かれていた「妻」の理想概念、

とりわけ夫に対する妻の〈貞節〉(castità)や慎ましやかさ、信仰心、そして子孫をもうけるための〈多産〉などの「徳」(virtù)を強調しており、これらのモチーフは、像主の女性、花嫁あるいは妻にそなわる諸徳を読み解くアトリビュートとして機能していた。このような分析は、ワシントンでの展覧会図録 (David Alan BROWN(ed. by), *Virtue and Beauty. Leonardo's Ginevra de' Benchi and Renaissance Portraits of Women*, Oxford, 2001) において一定の成果をみている。

これに関し、申請者はレオナルド・ダ・ヴィンチの初期作《ジネヴラ・デ・ベンチの肖像》(1474-76年頃、ワシントン、ナショナル・ギャラリー)を取り上げ、同作品裏面にみるインプレーサの銘文「VIRTUTEM FORMA DECORAT」(形象・形式は諸徳を飾る)の意味、像主ジネヴラの教養と知性を物語る逸話を論じ、さらにはミラノ滞在期の《白貂を抱く貴婦人(チェチリア・ガッレラーニ)》(1483-90年頃、チャルトリスキ・コレクション)と白貂に関する寓意象徴〈誇り高き純潔〉を解明することで、レオナルドの女性肖像描写に彼の女性コンプレクスを読み取るというフロイト以来の通説を退け、レオナルドがとりわけ才知に富む「有徳の(virtuosa)」女性を好んで描いたこと、定型化された儀容的なプロフィール肖像ではなく、内面性と個性を伴う肖像描写を探求して4分の3肖像の女性肖像画を描き始めたこととみられること、等を指摘した(拙論「彼女の『魂と諸徳』——初期ルネサンス女性のジェンダーと肖像芸術の問題」、『兵庫教育大学芸術教育研究誌 芸術と教育』、兵庫教育大学芸術系教育講座(査読無)、平成17(2005)年3月、第9号、pp. 43-60)。初期ルネサンスの女性肖像画作例に関する研究史は、1960年代以降のフェミニズム美術史学の台頭とともに、女性と芸術との関わりを精査するかたちで豊かな成果を生み出してきている。

しかしながら、君主などのごく少数の特異な例を除くと、富裕市民層であれ貴族層であれ、像主の女性については情報に乏しい。他方、ルクレティアやクレオパトラ、ミューズやフローラなどの古典古代の神話・歴史人物を模して描かれたとみられる肖像作例も数多く存在する。たとえば M. CACIORGNA, R. GUERRINI, *La Virtù figurata. Eroi ed eroine e de l'antichità n e l'arte senese tra medioevo e Rinascimento*, Siena, 2003 では、シエナ派絵画における神話及び歴史的人物像の描写作例を集成し、これらの人物像がさまざまな「美徳・徳」(virtù)の手本あるいは範例であると同時に、歴史・神話人物の「肖像」として描かれていたことを示唆した。人物画・肖像画に対する15-16世紀の人々の眼差しが、描かれた人物のうちに「徳」の概念

を読み取り、肖像人物をひとつの道徳的「範例」とみなすという、きわめて観念的な枠組みのうちにあったことについては、更なる考察が必要であろう。

フェミニズムの影響を受けた近年の美術史学研究では、F. H. JACOBS, *Defining the Renaissance Virtuosa. Women Artists and the Language of Art History and Criticism*, Cambridge, 1997 を嚆矢として、ルネサンス期の女性概念と、女性美術家に対する同時代の批評・評価の様相に対する分析が進められているが、とりわけ興味深いのは、女性画家が肖像画を手がけて名声を博した例である。クレモナの中層貴族の出身で、自画像を手がけ、スペイン王妃付女官にまで取り立てられたソフォニズバ・アングイッソーラ(1532/33-1625年)は、職業画家ではなく、洗練された「宮廷の貴婦人」(la donna di corte)あるいは「有徳の女性」(la virtuosa)としてイタリア及びスペインの宮廷社会を生きた。その作品は、女性をめぐる徳の概念が、盛期ルネサンス以降マニエリズモの文化の中で変容をとげ、舞踏・音楽・文芸のほか絵画をも心得た、洗練された「宮廷の貴婦人」あるいは「女性教養人」(la virtuosa)として概念化され、視覚化されていったことを例証するものとみなされうる。

また、ソフォニズバの自画像作品群については、同時代の女性をめぐる美徳と理想の諸概念を包括するものであると同時に、彼女自身の自己表出・自己規定と芸術的探求とを併せ持つものとして注目されることである。美術史学上のソフォニズバの位置づけ、その研究と評価をめぐることは、君主層など社会的最上層の女性ではなく、上層あるいは中層貴族の無名の女性が絵画制作を嗜むということの同時代における意義と社会的背景、女性画家を「有徳の女性」とみなす同時代の批評の特性を明らかにする必要がある、と考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究では、ボッカッチョの『名婦人伝 (*De mulieribus claris*)』(1361-62年頃、Giovanni Boccaccio, *Famous Women*, ed. and trans. by V. Brown, Harvard Univ. Press, Cambridge, 2001)以降、15世紀-16世紀中期に盛んに論じられた女性の美徳と女性概念をめぐる諸論を背景として、以下の3項目を通じてルネサンス期の徳の概念と女性肖像画との関係構造を分析する。

(1)15-16世紀中期イタリアにおける女性の徳の概念とこれに関わる絵画描写の流行—古代女王デイド、トミュリス、クレオパトラのほか、ルクレティア、ウィルギニア等の古代主題で〈貞節〉や〈一途さ・一貫性〉などの

美德の範例とされたもの一の推移を解明し、女性肖像画作例との比較検討をおこなう。

(2)ルネサンス期の女性と女性肖像画の関わり方をみずから例証したといえるクレモナ出身の女性肖像画家ソフォニズバ・アンギッソーラ(1532/33-1625年)の生涯と、彼女の自画像を含む約40点の肖像画群に対する解釈批評の研究史をまとめる。

(3)ルネサンス期における女性の徳の概念とその視覚的表象のシステムの例証として、15世紀-16世紀前半のイタリア社会における女性概念のもとで「ヴィルトゥオーザ(徳のある、教養のある女性)」と称されるに至った女性画家ソフォニズバの肖像作品群の特異性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1)先行研究文献の精読のほか、同時代文献の精読・翻訳作業を通じて研究批評史の把握と再検討を進めた。

(2)短期海外渡航による作品の実見調査およびデジタル画像の収集による形式比較調査をおこない、進めた。

#### ①平成21年度-----

(1)ソフォニズバ・アンギッソーラに関し、PERLINGIERI, Ilya Sandra, *Sofonisba Anguissola. The First Great Woman Artist of the Renaissance*, New York, Rizzoli, 1992と国際展図録AA.VV. (a cura di Mina Gregori), *Sofonisba Anguissola e le sue sorelle*, Centro culturale "Citta di Cremona," Cremona, Italy, Sept. 17-Dec. 11, 1994; Leonardo arte, Milano, 1994その他を参照しつつ、約40点の現存作例のうち、作者帰属等について検討しな基本情報と解説批評の例を整理した。

(2)15-16世紀の肖像画史とソフォニズバに関する批評記述のほか、女性の「美德」に関わる文献を収集し、精読しながら分析を進め(L・B・アルベルティ、1434/35年、レオナルド・ダ・ヴィンチ、15世紀末、G・ヴァザーリ、1550-1568年、G・P・ロマッツォ、1584年等)、女性美術家が描いた肖像画に対する賞賛は、主題となる像主の容姿や長所あるいは「徳」を賞賛する言辞と重なりあう傾向を強く持っていたことの論証・解明に関する準備が進んだ。

(3)ソフォニズバ作品の多くはイタリア各地(クレモナ、シエナ、フィレンツェ、ナポリ)とスペインのマドリッドに散在するうえ、常設展示されていない例があるため、実見調査の計画準備を進めた。

#### ②平成22年度-----

(1)9月にイタリア及びスペインへ短期海外

渡航し、作例に関する実見調査と文献閲覧・資料収集を進めた。前年度に進めた作例情報の収集・整理その他を参照しつつ、作者帰属の疑わしいものも含め約40点)について、基準作とみなすべき重要作例について研究を進めた。

(2)15-16世紀の肖像画史とソフォニズバに関する記述文献として、最も重要なG・ヴァザーリの記述(*La vita di Properzia de Rossi*他、1550年版及び1568年版における言及部分)を訳出のうえ、引用に関する出典について訳注を付した。さらに、記述の構成や批評記述の構造とその特徴に関して考察を進めた。女性美術家が描いた肖像画に対する同時代の批評と賞賛は、主題となる像主の容姿や長所あるいは「徳」を賞賛する言辞と重なりあう傾向を強く持っていたこと、同時代の女性概念あるいはジェンダーが強く反映されていたことを論証・解明する論文の執筆を開始した。

(3)ソフォニズバと比較対照すべき例として、女性彫刻家プロペルツィア・デ・ロッシ、ラヴィニア・フォンターナなど16世紀の女性美術家に関する調査を進めた。

#### ③平成23年度-----

(1)15-16世紀の肖像画概念と肖像画の受容の状況、ソフォニズバ作品に関する批評記述について、L・B・アルベルティ(1434/35年)、レオナルド・ダ・ヴィンチ(15世紀末)、G・ヴァザーリ(1550-1568年)、G・P・ロマッツォ(1584年)のほかA・カーロ書簡(1558-59年)について、原文を精読しつつ訳文を整え、論文資料原稿として準備した。

(2)ボッカッチョ著『著名女性伝(通称:名婦人伝)』以降、15-16世紀に流布した数多くの女性論の著作や抄本のうち、「女性と絵画」あるいは「女性画家」の概念と関わる事例を集成し、検討を進めた。〈肖像を描くマルキア〉など、プリニウスとこれにもとづくボッカッチョの著述により伝承されていた古代の女性美術家の事例を絵画化した中世末期~15世紀のイタリア・フランスの細密画装飾写本の挿画例は、「女性画家」の視覚的イメージを示すが、それはまた同時に、〈絵画芸術の寓意像〉に変換または同一視される可能性をはらんでいたとみられる。また、カスティリオーネ『宮廷人』が論じる〈カンパスペを描くアペレス〉の逸話は、「画家=男性」と「モデル=女性」という関係性を前提としていた。これらの人文主義的な思潮・事例に留意するならば、ソフォニズバが自画像を数多く描いたのは、絵画を描く類稀な女性あるいはヴィルトゥオーザとして事故を表象し、宮廷への進出を図るためでもあったと考えられる。

また、二重肖像画であり自画像をも含む

《ソフォニズバ・アングィッソーラを描くベルナルディーノ・カンピ》において、カンヴァスに向かいながら振り向く師匠カンピの姿を描くことにより、彼女は「画家であり師匠である男性をモデルとして描く女性画家」としての自己と、「師匠である男性画家のモデル」として画中のカンヴァスに描き出される「ヴィルトゥオーザとしての虚像」に近い自己、という2つの自己の錯綜あるいは分裂を暗示したことの背後には、洗練された女性画家の知略が隠されていると考えられる。

#### ④平成24年度-----

(1)15-16世紀の肖像画概念と肖像画の受容の状況、ソフォニズバ作品に関する批評記述について、L・B・アルベルティ(1434/35年)、レオナルド・ダ・ヴィンチ(15世紀末)、G・ヴァザーリ、(1550-1568年)、G・P・ロマツォ(1584年)のほかA・カーロ書簡(1558-59年)について、原文を精読しつつ訳文を整え、論文執筆を開始した。女性画家の仕事の「入念さ」や「細やかさ」、対象を写し描く際の「忠実さ」などを称賛する批評記述は、同時代の女性概念、女性に望ましいと考えられた美德を強く反映するものと考えられる。

(2)ボッカッチョの著作『著名女性伝(通称:名婦人伝)』以降、15-16世紀に流布した数多くの女性論の著作や抄本のうち、「女性と絵画」あるいは「女性画家」の概念と関わる事例を集成し、検討を進めた。〈肖像を描くマルキア〉、同〈イライア〉など、すぐれた美術家として伝承されていた古代女性の事例を絵画化したゴシック末期-ルネサンス初期の細密画装飾写本挿画の現存例は、「女性画家」をめぐる視覚的イメージの原型として、広く流布していたと推定される。だがそのイメージは、歴史的人物としての女性個人の容貌を考証的に記録するものではなく、むしろ一般的な「女性画家」の姿を提示するものであって、「女性画家」の図像それ自体は、〈絵画芸術の寓意像〉に変換または同化される傾向をはらんでいたと考えられる。

また、カスティリオーネ『宮廷人』が論じる〈カンパスペを描く画家アペレス〉の逸話は、美あるいは女性美を画家が最もよく理解し描出しようという趣旨で語られるが、「画家=男性」と「モデル=女性」という関係性を前提とする点で16世紀的である、注目されるだろう。

人文主義のもとでの古典愛好を背景とするこれらの思潮や諸事例に留意するなら、ソフォニズバによる自画像および肖像画制作には、幾つかの深い含意が読み取られることになる。まず、彼女は署名銘文に「処女」

(virgo)という語を多用したが、これは当時、女性に求められていた処女性や〈貞潔〉の美德を強調するばかりではなく、古典古代

のアマゾネスなどの「女戦士」(virago)を連想させる語でもあった。「処女ソフォニズバ」が描いた《チェス遊び》に興じるアングィッソーラ姉妹の肖像(ポズナン、ポーランド国立美術館)は、女駒あるいは女王駒が強大な女戦士として大胆に動く新たなルールのもと、チェスが教養人好みの知的な模擬戦闘遊戯として人文主義的な教養人・宮廷人男性に愛好されつつあった時期に、少女たちだけでチェス・プレイを楽しむという場面を描いており、教養と才能にあふれる女性を肯定・礼賛する特異な含意を秘めた作例として評価される。またさらには、師匠の肖像として《ソフォニズバ・アングィッソーラを描くベルナルディーノ・カンピ》を手がけることで、「師匠画家が描く肖像画のモデルとなっている自己」と、「師匠画家をモデルとして描く女性画家としての自己」を控えめに表出していることの背後には、16世紀ならではの女性画家の知略が隠されていると考えられよう。画中の師匠ベルナルディーノの肖像は精緻に描きながらも、その師匠が制作中のカンヴァスにみるソフォニズバの半身肖像は過剰に大きく、細部は曖昧である。ソフォニズバは、師匠に敬意を表しながらも、女性画家としての自己の名声の虚しさと、評判になった女弟子を「自己の作品」として誇る師匠、男性画家たちの態度を皮肉な思いで見つめていた可能性が高い。

ソフォニズバ・アングィッソーラの肖像画制作は、職業的な画家の営みではなく、むしろ宮廷女性の教養ある嗜みとしておこなわれた。作品の代価を金銭で受け取ることは決してせず、返礼の品として宝飾品や高級織物を受け取るか、宮廷社会における厚遇と恩顧を得たのである。スペイン王フェリペ二世宮廷におけるソフォニズバは、王妃イサベル・ド・ヴァロワに絵画制作の手ほどきをしたが、その身分は宮廷画家ではなく、最上層貴族出身の他の貴婦人たちと肩を並べる「王妃付き女官」であった。スペイン滞在期にソフォニズバが手がけたとみられる王族肖像は公式の肖像画ではなく、それらにはむしろ、私的な親近性にみちたディレクティブなスタイルが認められる。フェリペ二世の肖像メダイオンを気安く右手で斜めに持つ王妃の肖像(マドリッド、プラド美術館)は、その好例だろう。

ソフォニズバ・アングィッソーラは、画家アペレスは男性で、画架が描くモデルすなわちカンパスペは女性である、といった伝統的通念の枠組みを、さりげなくしなやかに脱却していたと考えられるだろう。

#### 4. 研究成果

(1)表象文化論学会誌『表象』に学術論文1件を投稿、審査を経て掲載・発表した。

(2) ソフォニズバに関わる主要な同時代文献原文とそれらの拙訳、及び上記(1)の学会誌発表論文と自著の小論2件(『写し描く』(ritrarre)ことと「肖像画」(ritratto)をめぐる同時代の記述とソフォニズバ・アンギッソーラをめぐる諸問題)、「肖像画をめぐる所有の欲望、あるいは支配と服従の概念」、および参考文献一覧等をまとめて「平成21-24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書」を印刷製作し、16世紀イタリア美術史・女性史の研究者など、関係者に送付した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

① 喜多村明里、〈絵筆を持つ私〉と〈絵画芸術〉の表象——16世紀イタリアにおけるS・アンギッソーラのセルフ・イメージをめぐる——、表象、表象文化論学会誌、査読有、07巻、2013、pp. 230-247.

[学会発表] (計 0件)

[図書] (計 1件)

① 喜多村明里、『平成21-24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 ソフォニズバ・アンギッソーラ研究：一六世紀イタリア女性肖像画の諸問題』、平成25年3月(2013)、pp. 1-54 (A4版計54頁)。

[産業財産権]

○出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等 現況なし

PDFファイルでの開示公表などを今後の課題としたい。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

喜多村 明里 (KITAMURA AKARI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90294264

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：